

# 毛沢東VS劉少奇そして鄧小平

——1966年8月の北京の暑い夏——

北村 稔

## はじめに

本稿は、文化大革命が開始された1966年夏の北京における、劉少奇と毛沢東さらには鄧小平の間で展開された権力闘争の核心部分を探索する試みである。

文化大革命に関しては夥しい著作や資料集が存在している。しかし本稿で論じる文革開始直前の生々しい権力闘争の実態、すなわち劉少奇が共産党中央執行委員会全体会議を招集して、投票により毛沢東を罷免しようとした事(名誉主席への引退)を正面から論じた文章は一つしかない。それは、本稿が基本資料として用いている当時のユーゴスラビアの駐北京記者のレポートである。このレポートは、文革終了直後の1977年に香港で出版された郭志冰博士編『鄧小平』(中国文化中心、1977年)に、中国語訳が転載されている。しかし目下のところ、筆者には原文の所在が確認できていない。郭志冰氏は他にも中国関係の著作を刊行しており、管見では『大毒草劇集—吳晗、田漢・郭志冰「前言」』(中国文化中心、1977年)がある。

歴史研究では、とくに資料が豊富な近現代史研究においては、レポートの原文を見つけ出し資料としての信憑性に留意しつつ、内容を分析しなければならぬ。ところが今回に限って言えば、レポートの原文も執筆者名も判明していない。しかしレポートの語る興味深い内容を、他の

文革関連の資料や論考とつきあわせて検討してみることが、文化大革命研究に資することは疑いない。レポートの原文と著者に関して筆者は探索を続けているが、これまでの結果を報告しておく。

中国語訳されたレポートには、「解題」が無い。執筆者として、(南斯拉夫「政治報」駐北京記者)、と記されているだけである。南斯拉夫は、かつてのユーゴスラビアであり、今日ではセルビア、クロアチア、セルビアなど6つの共和国に分かれている。探索の結果、「政治報」はセルビアの著名な新聞で、1905年に刊行され現在も発行されているPOLITIKAあることが判明した。

セルビア大使館に連絡をとり、POLITIKAの閲覧を試みることは可能であろう。そしてこのレポートがPOLITIKAに掲載された日時は、本稿の「あとがき」に述べるとおり、1966年の8月18日から12月末までの間である。しかし筆者はセルビア語には全く不案内であり、たとえレポートの原文を発見したとしても「猫に小判」である。同様にレポートを中国語訳した香港の研究者にしても、セルビア語が読めた可能性は甚だ低い。かくして筆者は、レポートが中国語訳された経緯を以下のように推理してみた。

このレポートは、先ず英訳が英字紙に掲載されたのである。<sup>①</sup>そして英訳レポートを、香港の研究者が中国政治に対する豊富な知識に基づいて中国訳したのである。中国語訳レポートに見られる、固有名詞の漢字表

記の正確さがこの経緯を裏打ちする。

筆者によるレポートの来歴確認への努力はこれからも続けられるが、本稿では来歴確認はひとまずおき、レポートの語る興味深い内容を他の文革資料と突合せ、生々しい権力闘争の実態を探ってみたい。

## 1

はじめに、中国語訳レポートの日本語全訳を以下に示す。段落数を増やし、必要な箇所には「」で注を付けた。レポートの表題は「鄧小平倒戈」である。倒戈とは戈（ほこ）を逆に向けることであり、「寝返りを打つ」の意である。鄧小平が裏切ったのである。

〈鄧小平の裏切り〉 ユーゴスラビア「ポリティカ」

駐北京特派員

北京飯店は、外国人記者クラブの様相を呈していた。この一流ホテルに滞在している外国人記者たちは、毎晩のように階下のレストランで情報を交換していた。4月27日の夕食のテーブルで、私は何人かのアジアの記者たちが、北京市長の彭真「共産党中央政治局委員・北京市委員会第一書記」にアポイントをとって面会に行ったが会えなかったと話しているのを聞いた。

彭真は、監禁されたとも噂されている。いうまでもなく彭真は、鄧拓のために巻き込まれたのである。よく知られているとおり鄧拓は彭真の知恵袋であるが、4月以来、「解放軍報」「人民解放軍の機関紙」紙上で名指しの攻撃に晒されていた。しかし翌日になって詳しく調べたところ、彭真は逮捕されていないことがわかった。

彼はこの日の午前中に二人の藍色の制服の護衛に守られて、車で中南

海（劉少奇や周恩來の事務所のあるところである「ママ」）に赴いた。しかし北京市党委員会の建物の前に、突然に十数名の黄色の服の解放軍兵士が現れ、彭真が事務所に入ることを禁止したのである。

以上の情況は、一週間前から記者仲間を取りざたされている事、すなわち中国共産党の中央委員会が分裂して毛沢東と林彪は上海で別の「党中央」を組織し、劉少奇がコントロールする北京の「党中央」と対抗している事を実証していた。

軍人が北京市党委員会の建物を占拠している事態から見て、これは噂ではなく明白な事実であった。さらにまた、「上海中央」が、「北京中央」に対して行動を起こしたことを示していた。

5月15日の午後、私は中国の外交部から情報を得た。毛沢東が当日の夜に列車で北京に戻ってくるという。私は北京駅へ急ぎ、何人かの記者にも電話で連絡した。しかし我々は、4時間も待ちぼうけを食っただけであった。後に判明したところでは、毛沢東は途中の済南で列車を降りたのである。原因は探るべくもなかったが、毛沢東が北京の情況をコントロールしていないからであろうと考えられた。

私の考えの正しさは、たちまち事実により証明された。次の日、同僚のルーマニア人記者が「新華社」「中国の国营通信社」の記者から、北京市委員会はまだ彭真のコントロール下にあると告げられたのである。軍隊の圧力で、彭真は北京市党委員会の事務所に入れないが、腹心の部下たちにより厳しく警護される彼の自宅には毎日多くの人が出入りしており、北京市党委員会は活動の中心を彭真の自宅に移しているという。

6月の初に発生した事件は、今ではよく知られている。林彪が腹心の部下で大將の楊成武と、同じく腹心の楊勇の二人を北京に派遣し、力づくで北京市党委員会を改組させ、さらには「人民日報」と北京放送局および「新華社」を武力で接収したのである。僅か数日間に、「上海中央」

は疾風迅速の武力クーデターの方法で「北京中央」を圧倒した。劉少奇派は北京に軍事力を持たず、宣伝機関の支配権も失ってしまった。しかしこれで屈服したわけではなく、返って大規模な反撃に打って出た。

劉少奇派は、二年前にソ連共産党がフルシチョフを罷免した方法「フルシチョフは1964年にソ連共産党中央委員会第一書記を罷免された」を真似る事に決めた。すなわち、緊急の中央執行委員会全体会議を招集し、投票により毛沢東「中央執行委員会主席」を罷免し、林彪による党中央の篡奪を阻止するのである。しかし劉少奇派は、中央執行委員会全体会議において、毛沢東と林彪に勝る多数票を確保していなかった。もし毛沢東と林彪を投票で倒すのであれば、中央書記処総書記の鄧小平の支持を取り付けねばならなかった。

6月のあいだ中、劉少奇と彭真はこの一点に集中して活動した。その後判明したところでは、新たに北京市党委員会の第一書記に就任した李雪峯が劉少奇と鄧小平の橋渡しとなった。そして彭真自身は、6月中旬以降は西北地区や西南地区に赴いて活動し「地区は数省を含む大行政区。東北、西北、西南、中南、華東、華北の6つがあった。各地区はそれぞれの地区名を冠した6つの共産党中央分局により統括された」各地にいる中央委員たちと連絡をとり、やがて開催される中央執行委員会全体会議の多数派工作を行っていた。彭真とともに西北地区に赴いた人物に、中央書記処書記の楊尚昆がいた。楊尚昆は彭真が西南地区に赴いたあとも、西北地区に留まって活動していた。

彭真の活動は、大きな成果を挙げるようになった。彭真が北京に戻ったとき、政治局委員で西南局第一書記の李井泉が同行していた。また楊尚昆は、西北局第一書記の劉瀾濤を北京に出迎えていた。これらの成果は、毛沢東・林彪派を投票方式で打倒する自信を劉少奇派に与えていた。

7月の初より、中国大陸の各地から中央委員たちが続々と北京に集

まった。このような状況を背景に、私は7月8日に打電した記事の中で、まもなく中国共産党8期11中全会が開かるという観測を述べた。この前後の数日間、北京の外国人記者たちは誰もが大忙しであった。重大事件が起こることは誰にもわかっていたが、状況が複雑すぎて、どこから取材すればよいかわからなかった。

7月10日の夕食時にフランスの記者が、人手不足を補うため手分けして取材し情報を共有しよう、と提案した。このあと手分けして取材した結果、すでに7月15日までは51人の中央委員と38人の中央委員候補が北京に集まっていることが判明した。大部分の人々は書記処のビルディングに泊まっていたが、地位の高い少数の人々は劉少奇や彭真に招かれて彼らの巨大な住居に宿泊していた。少なくとも彭真の住宅には、李井泉、烏蘭夫（内蒙古地区の最高指導者「ママ」、李葆華（華東局書記、李大鈞の子、彭真を叔父さんと呼んでいた「ママ」）らの人々が宿泊していた。

何人かのソ連の記者が「科学院」「中国科学院、1949年設立」方面から得た情報によれば、中央執行委員会全体会議の開会期日は7月21日に決定されていた。しかし他の方面からの情報がとれず、確証が得られなかった。

北京に到着している中央委員と中央委員候補の名簿を見て、我々は二つの興味深い事態を発見した。一つは、華東地区と中南地区の中央委員たちの大部分が、到着していないことである。彼らは明らかに「上海中央」に忠節を尽くしているのであるが、少数派であった。二つ目は、西南地区と西北地区の中央委員たちは、ほぼ全員が集まってはいるが、軍隊を率いる委員たち「軍人の共産党員たち」が、一人も来ていなかった。華北地区の中央委員たちは本来から全員が北京におり、東北地区の中央委員たちは、約半数が来ていた。

7月17日の夕食時に、我々は一つの情報を得た。北京・天津間の鉄道



連絡が突如として断絶したという。明らかに重大事件が発生していた。しばらくして判明したが、南方から北京に通じるあらゆる鉄道連絡は、7月17日の正午を以って断絶し、漢口から北京および南京から北京への二つの主要鉄道と幹線上の全ての列車や車両が、「国防部」に徴用されていた。

北京駅の周辺区域は、夜の十時から戒厳状態におかれていた。正式の戒厳令は出されていなかったが、駅一帯には解放軍が満ち満ちており、通行禁止となっていた。取材にいったハンガリーの記者は、取材相手から面会を断られた。記者の一人が、国営旅行社に電話して天津行きの汽車の切符を購入しようとしたが、切符は全て売り切れているという返事であり、いつになったら切符があるかは、「通行再開」を待たねばならなかった。

7月18日の午前中、北京市内には林彪が大規模な部隊を華中地区から北京に移動させたという噂が、盛んに流れていた。しかし市内には軍人の姿を見ず、郊外に駐屯して北京全体を包囲していると考えられた。当日の午後になり、我々は噂が真実であることを確認した。外交部新聞局「外交に関する言論や広報業務を所管する。新聞は中国語ではニュースの意」から特派員の一人一人に電話があり、しばらく北京飯店の中に留まり外出してはならないと通告してきたのである。本来、外国特派員たちは、北京の周囲10キロ以内の自由行動を許可されていた。しかし当面は、この許可が取り消されたのである。ソ連大使館のスタッフの一人が、任期満了のため7月19日に飛行機でソ連に帰ることになっていた。しかし19日の昼に北京西郊の飛行場に向かう途中で、解放軍のために追い返されてきた。この日の晩になって外交団方面から得た情報によると、北京に着いたばかりの林彪の部隊が山西省方面に押し出し、陝西省から来る反林彪の部隊の北京への進軍を阻止しようしていた。北京の外交筋には、

中国共産党内での内戦勃発に関する噂が飛び交っていた。一部の林彪の部隊は北京市内に進駐し、総参謀長の羅瑞卿を逮捕したという。

このあと各方面から得た情報をもとにして、我々は7月の18日から20日にかけて発生した事件の輪郭を、次のように描くことができた。

毛沢東は18日の午前中に、北京に集まっていた総ての中央委員と中央委員候補に対し、次のように言明した。すなわち、自分は数日中に北京にもどり「中央執行委員会全体会議」に参加するので、自分が戻るまでに勝手に開会してはならない、と。これに対して劉少奇派は、すでに過半数の中央委員と委員候補が7月21日の中央執行委員会全体会議開催に同意しており、党規約では半月前に会議の開催通知を参加者全員に出すのであり、会議の開催延期は出来ないと言明した。しかし林彪の部隊が北京に進駐して配置につき、武力で会議の開催を阻止しようとする姿勢を示した。これに対して劉少奇派は、党規約遵守という名分を唱えて軍隊を北京に引き入れようとした。そして新疆軍区司令員の王恩茂(中央委員―ママ)が羅瑞卿の命令を奉じて、陝西省に駐屯している指揮下の一個師団を北京に向けて進発させた。これに対し毛沢東、林彪、および新任の総参謀長代理の楊成武は、直ちにこの師団の師団長に進軍停止の命令を打電し、間一髪のところの内戦の危機が避けられたのである。当時、林彪の軍隊は山西省で作戦部署についており、もし王恩茂の部隊が進んでくれば武力で阻止しようとしていた。しかし最高当局からの命令に接した師団長が、進軍を停止したのである。

20日の夕方になり我々が得た情報では、「中央執行委員会全体会議」は計画どおり翌日に開会されることが決定されていた。しかし翌日の朝になり、状況がまた変化した。総書記の鄧小平が開会前夜に心変わりし、「毛主席」の指示を受け入れると表明し、毛沢東が北京に戻ってから「中央執行委員会全体会議」を開催することに決めたのである。今でも我々

には、なぜ鄧小平が重大な瀬戸際で劉少奇を売ってしまったのかわからない。毛沢東・林彪派を倒す自信がなかったのか、或は林彪の強大な実力を見せつけられたため、進んで投降したのかもしれない。かくして鄧小平が当初の志を変化させたため、劉少奇派は、「中央執行委員会全体会議」開催の必要人数を集めて毛沢東を罷免することが、できなくなってしまった。

7月の下旬になり、林彪の腹心である楊成武や秘密警察の首脳である謝富治は、北京を完全に支配下においた。7月28日の午後、毛沢東や林彪さらには上海に集結していた親毛沢東派の中央委員たちを乗せた4機の飛行機が北京に到着した。毛沢東はこれより9ヶ月以前に、北京の状況を不利と見て南方に居を移していた。そしてこの時になり、林彪の大規模な部隊が嚴重に警備する北京に戻ったのである。

私は8月3日に打った電報で、「中央執行委員会全体会議」はすでに秘密裏に開催されている、と伝えた。他の外国人記者たちも、続いて同様の電報を打っていた。しかし後に判明したところでは、中国共産党第8期11中全会は8月1日に中共中央書記処のビルディングで開始され、このあと12日間も開会されていた。会議の公報からは、開会中におこなわれた闘争の状況はうかがい知れない。しかし多くの中央委員や影響力の大きい鄧小平が毛沢東・林彪派に投降したことからみて、劉少奇が開会中に下風に立たされたことに疑いは無い。結果として、改選された政治局の序列では林彪が第16位から第2位に抜擢され、劉少奇は第2位から第7位に降格された。また林彪派の何人かの主要人物たちが劉少奇よりも上位に上った。鄧小平についていうと、当初は劉少奇と結託し最後には毛沢東・林彪派に投降し、功績と過ちが半ばしていた。その結果、元来の地位に変化は見られなかったが、新しい党中央においては、もはや鄧小平は毛沢東・林彪派からは同志であると見なされなかった。あれこ

れ迷った結果として当面の地位を保つことはできたが、将来において、毛沢東・林彪派が勢力を得ようが或いは劉少奇派が勢力を得ようが、いずれにせよ鄧小平は始末されてしまうことを免れない。アジアの記者の一人が述べたとおり、鄧小平の行動はまさしく「聰明一世、胡塗一時」「聰明な人も時に愚かなことをする―弘法も筆の誤り」であった。彼の一時の誤りが一生の運命を決めてしまうことになる。

新しい「党中央」は、9ヶ月前からの「上海中央」と「北京中央」が合体したものである。しかし内部の矛盾は解決されていない。劉少奇は降格されたが処分はされず、彼の実力が依然として大きいことを示している。彭真は今も巨大な住宅でのんびり暮らしており、出入りに際しては大勢の警備員がつき従っている。

北京にいる外国人記者の誰もが、状況は沈静化しておらず更に大きな闘争が醸成されていると感じている。毛沢東が8月18日に「紅衛兵」を正式に組織し、「毛主席を守れ」のスローンを叫ばせたことは、毛沢東自身が、自分の周りだけでなく大陸全体に反対勢力が存在しているのを知っている事を示している。もともと顕著な事実は、王恩茂、李井泉、烏蘭夫などの人物たちが、現在でも地方で勢力を維持していることである。

## 2

それでは日本語訳をもとにして、1966年夏の北京の権力闘争の実態を検討していくことにする。

ポリテイク記者のレポートの核心は、二つの部分からなる。中央執行委員会全体会議の開催をめぐる駆け引きと、この駆け引きの最終段階として軍隊の導入による武力衝突の危機が存在したという二点である。

はじめに、全体会議開催をめぐる駆け引きであるが、結果として毛沢東の主導により8月1日から開かれた全体会議には、かなりの数の中央委員や中央委員候補が欠席している。会議には欠員を埋めるためであろうか、出席資格の疑わしい「各中央局と各省、各市、各自治区の党委員会の同志、中央文化革命小組の成員、中央各関係部門の同志」が出席し、明らかに出席資格のない「首都の大学・高専の革命的教員と学生」たちまで出席していた。この事実は会議の「公報」で確認できることであり、会議開催をめぐる大きな対立があったことに疑いはない。

同時代の出来事として文化大革命の動向を詳細に分析していた人物に、丁望がいる。当時、丁望は香港で「当代中国研究所」を組織しており、1969年には日本を訪問して講演を行っていた。丁望によれば、当時の共産党中央執行委員会の構成状況は以下のとおりである。

1966年当時の中央委員と中央委員候補は、1956年の共産党第8期全国大会で選出された人々であった。そして当初の人数は中央委員97名、中央委員候補98名である。このあと死亡と補填による異動の結果、66年現在では中央委員92名、委員候補79名であった。

次にその内訳であるが、中央委員92名のうち明確に毛沢東派に分類できるのは22.82パーセント、劉少奇や鄧小平を含め走資派などのレッテルを貼られて毛沢東派から対立分子と見なされていたものは56.52パーセント、過去に毛沢東派から批判された経歴を持つものが5.22パーセントであり、その他の少数の委員は現実政治の舞台から引退していた。

また中央委員候補79名のうち、毛沢東派に分類できるものが8.86パーセント、毛沢東派から対立分子と見なされていたものが78.48パーセント、過去に毛沢東派から批判された経歴を持つものが10.13パーセント、現実政治の舞台から引退していたものが2.53パーセント

であった<sup>③</sup>。

以上の数字は、中央委員と中央委員候補の三分の二以上が毛沢東派と対立していることを示し、劉少奇と鄧小平が協力すれば、投票により毛沢東を罷免することが可能であった実情を物語る。

1999年に産経新聞社から出版された『毛沢東秘録』は、夥しい中国語の公刊資料に基づく労作であるが、中国共産党8期11中全会には141人の委員と委員候補が出席したと述べられている。全体の2割以上を相当する30名の委員と委員候補が欠席したのである。ちなみに会議には劉少奇も出席し、毛沢東から文革の進行を妨害したと厳しく批判されていた<sup>④</sup>。

劉少奇たちが、多数派工作に基づく投票により中央執行委員会主席の毛沢東を罷免しようとした実態を明らかにする、興味深い証言がある。文革中に駐北京記者であったハンガリーの記者が後年になり『鄧小平』という著作を出版し、出版直後の1988年に中国語版が出現した。この著作の中に、実態が語られている。それによると、毛沢東の罷免は、名誉主席への引退という花道の用意されたものであった<sup>⑤</sup>。そしてこの名誉主席のポストは、ハンガリー人記者もいうとおり、1956年の8全大会で党規約の中に設けられたポストであった<sup>⑥</sup>。

良く知られているとおり8全大会は、劉少奇と鄧小平が1956年2月にソ連共産党内で行われたフルシチョフによるスターリン批判を錦の御旗にして、毛沢東の独裁的権力を掣肘するために党規約と党組織の大幅な改革を行った大会である。劉少奇たちは党規約から「毛沢東思想」の文字を削りとり、党主席の権力行使をコントロールするための書記処を設け、総書記には鄧小平が就任したのである<sup>⑦</sup>。はたして劉少奇と鄧小平は今回もまた、フルシチョフ解任というソ連の事例にまねて、毛沢東を引退させようとしたのであろうか。歴史の皮肉であるが、スターリン



批判を行ったフルシチョフも、やがて失脚する。

筆者はハンガリーの記者の語る毛沢東の処遇をめぐる経緯を読み、以前からの疑問が氷解した。

よく知られているとおり、8ヶ月の長きにわたり北京を離れ南方に居を移していた毛沢東は、1966年の7月16日に武漢で揚子江を遊泳し、7月26日には人民日報に大きく報じられた<sup>⑤</sup>。なぜ毛沢東はこの時点で揚子江を泳がねばならず、その事が人民日報に大々的に報道される必要があったのか。

筆者には長いあいだ、以上の点に関する政治的理由が思い当たらなかった。しかし劉少奇たちが毛沢東を引退させようとしていた経緯を背景に据えると（当然、毛沢東には劉少奇らの意図はわかっていたはずである）、毛沢東の遊泳の意味が非常にはっきりする。自分はまだ若くエネルギーに満ちており、引退の必要などは無く政治を担当できるのだ、というアピールである。

この間の詳しい経緯は、『毛沢東秘録』によっても確認できる。すこし長くなるが、引用してみよう。

「・毛沢東は1965年の初め、米国人ジャーナリストのエドガー・スノーと会談した際、『もうすぐ上帝（神）に会いに行く』としきりに強調した。これが西側で報じられ、それを新華社が党幹部向け情報で伝えたため、指導部内に一時期、本当に毛沢東は重病で死期も近いのだと思うものも出た。天華編著『毛沢東と林彪』（内蒙古人民出版社、1998年）はそう書き、毛沢東の言葉は指導部の反応を見するための観測気球だった可能性を指摘する。事実、翌66年には毛沢東を「名誉主席」とする動きが指導部にあったともいう。だが、党内外の『右派』や『修正主義者』を打倒しようと、プロレタリア文化大革命という大事業に晩年の命運をかけた毛沢東は、ここで実権を奪われるわけにはいかなかったのだ。」<sup>⑥</sup>

このような状況を背景にすると、毛沢東が中央執行委員会拡大会議の開催延期を命じた日時がレポートのいう7月18日であることも了解できる。すなわち7月16日に泳いで自分のエネルギーを顕示し、その余勢で7月18日に会議開催の延期を命じたのである。

しかしながら、このあと直ちに行われた毛沢東の北京への帰還について、ほとんどの関連文献がレポートの述べる7月28日ではなく、7月18日であったと述べる。そして北京帰還後の毛沢東の行動にも言及する。たしかに毛沢東は7月18日に北京に帰還したのであり、レポートの書かれた時点では確認できなかったであろう。しかしレポートには、毛沢東の北京帰還を背景に発生していた7月17日から7月18日にかけての緊迫した状況が伝えられている。すなわち7月17日に国防部により突如として行われた武漢・北京間、南京・北京間の鉄道と幹線道路の封鎖、北京駅一帯の軍による戒厳状態、7月18日の林彪部隊北京進駐の噂、外国人記者たちに対する禁足令である。

このほかレポートには、毛沢東は7月28日に上海の中央委員たちを引き連れて飛行機で北京に戻ったのだと記述されている。何らかの根拠があると思われるが、詮索は今後の研究に俟ちたい<sup>⑦</sup>。

次に、中央執行委員会全体会議の開催をめぐる駆け引きの最終段階として、軍隊の導入による武力衝突の危機が存在したという点を検討してみよう。

毛沢東の一連の政治行動の背景には、常に林彪の軍事力が存在していたことは、多くの資料により確認できる。竹内実『ドキュメント現代史』の冒頭の「解説年表」は、すでに述べたとおり趙聰『文革運動歷程述略』を基礎に作成されているが、そこには1966年の3月中に林彪の部隊が北京に入り市内を制圧していたと述べられている。当時、劉少奇はパキスタン、アフガニスタン、ビルマの各国を訪問しており、林彪はその

虚をついたのだという<sup>①</sup>。

ちなみにレポートは、人民日報をはじめとするメディアが1966年の6月の初に林彪の軍におさえられたと述べている。事実として、6月1日を境に人民日報の論調は一変しており<sup>②</sup>、このような変化を可能にしたのは、軍の圧力以外には考えられない。

しかしながら、毛沢東不在下での中央執行委員会全体会議の開催を林彪の部隊が阻止しようとし、劉少奇派が林彪の軍事力に対抗するべく別の部隊に北京への進軍を命令したという事態は、セルビア人記者のレポートだけが語る大スクープである。

ちなみにセルビア人記者のレポートには、「アジアの記者たち」という記述が一度ならず出現するが、この中には日本各紙の北京特派員が含まれると考えられる。そしてレポートにいう、「アジアの記者の一人が述べたとおり、鄧小平の行動はまさしく『聡明一世、胡塗一時』「聡明な人も時に愚かなことをする―弘法も筆の誤り」であった」という一節から考えれば、これらの「アジアの記者たち」も、軍隊の動向に関する同質の情報をつかんでいたはずである。しかし当時の日本各紙の北京特派員の記事を見渡しても軍隊の動向に関する記載はなく、後になっても言及されていない。セルビア人記者のレポートはスクープではなく、裏づけの取れないガセネタなのか。なぜ日本の記者たちは報道しないのか。

この理由については、次のように考えることが出来る。すなわち、人民解放軍同士の武力衝突の可能性があったという事態は、かつての軍閥時代を髣髴させ、共産党の面子を大いに損なう事柄である。すでに1964年の「日中記者交換協定」で中国に都合の悪いことは報道しないことを承諾していた日本の各紙には、共産党の面子を損なうような事は報道できないか<sup>③</sup>ではないのか。

しかしまた、軍の動員命令が直前に変更されたという情報は解放軍内

部のトップシークレットである。この類の情報は新聞記者の仕事の範囲内にはなく、インテリジェンスすなわち諜報活動の賜物であろう。日本の新聞記者たちには、感知するところでなかったのかもしれない<sup>④</sup>。

武力衝突の危機が存在した情況証拠は、中国、台湾、香港で刊行された中国語資料の中に散見される。中国語資料を網羅する安藤正士『現代中国年表1941-2008』の1966年7月の項目を以下に示し、他の資料を援用して政治状況を浮かびあがらせてみよう。各項目の根拠となる中国語資料は（ ）内に示され、末尾の数字は該当箇所。

「7、8 毛沢東が江青宛の手紙で、林彪が5月18日に中央政治局拡大会議でクーデターの可能性にふれたことについて懸念を表明（中華人民共和国国史通鑑…31479 建国以来毛沢東文稿…12171）」

「7、27 康生が北京師範大学で、賀龍と彭真は2月に軍隊を導入してクーデターをおこそうとしたと非難。8月2日、鄧小平がこれをデマと否定（中国共産党執政50年1949-1999…304）」

当時の実情はつぎのようであった。すなわち、林彪は5月18日の中央政治局拡大会議で、「革命の根本問題は権力の問題であり権力があれば全てがある」と述べ、世界中でクーデターが頻発している状況を指摘したうえで、中国共産党内でのクーデターの可能性について言及していた。中央政治局拡大会議は、毛沢東の不在により劉少奇が主催していたが、林彪の演説は劉少奇の面前でおこなわれたのである。ちなみにこの会議により、彭真、羅瑞卿、陸定一、楊尚昆が書記処書記や書記候補の職務



を停止され、さらに彭真は北京市党委員会第一書記と北京市長の職務を解任され、陸定一は党中央宣伝部長の職務を解任された。そして林彪の発言は、やがて党内に通達されたため共産党内に極度に恐怖の雰囲気をかもし出したという。<sup>⑮</sup>

当時の緊張した北京の雰囲気は、レポートでは、毛沢東・林彪派の「上海中央」と劉少奇がコントロールする「北京中央」の対立激化として、的確に捉えられている。

次に康生の7月27日の発言であるが、康生は当時、1956年に選出された第8期の政治局員候補であった。しかしかつては1945年に選出された第7期政治局員であり、1956年の8全大会で降格されたのである。しかしこのあと8月1日から開催される第8期11中全会では、劉少奇より上位の中央政治局員に復帰することになる。<sup>⑯</sup>以上の事実から、康生が劉少奇と鄧小平に激しく対立する人物であったことがわかる。そして康生は、賀龍と彭真が2月に軍隊を導入しようとしたと非難したのであるが、はたして1966年2月の北京の政治状況は、どのようなものだったのか。

いずれの資料も伝える1966年2月の最大の出来事は、文革の前哨戦である学術討論が政治問題に発展することを規制しようとする「二月提綱」が、彭真により作成されたことである。この文書は、来るべき「文化大革命」の勃発を押さえ込む目的で作成されていたが、康生自身も「二月提綱」の作成に同席し、内容は毛沢東にも報告されていた。<sup>⑰</sup>

一方、上海では2月の初めから、毛沢東夫人の江青が林彪の委託により人民解放軍部隊の文学芸術活動に関する座談会を主催し、その結果を「座談会紀要」として整理していた。「座談会紀要」は、中華人民共和国の建国以来、文学芸術分野には先鋭な階級闘争が存在していると指摘し、初めて社会主義文化大革命という用語を使用していた。この「座談会紀

要」は毛沢東による三回の手直しのあと、4月10日に「党中央」により批准される。そして文化大革命が開始されると、批判論文の全てが「座談会紀要」に依拠して執筆されることになる。<sup>⑱</sup>

以上のように、1966年の2月は文化大革命勃発への岐路であった。したがって追い詰められた彭真が、状況を沈静化するための軍を北京に引き入れようとしたとしても、何ら不思議はない。林彪が3月に北京を軍事制圧したという説（注①参照）は、彭真が2月に実行しようとした計画への対抗措置であったと考えると平仄が合う。

鄧小平は8月2日になり2月の彭真の計画はデマだと否定したが、すでに8月1日からは毛沢東・林彪派の軍事管制下に、北京で8期11中全会が開始されており8月12日まで行われた。それゆえ鄧小平の発言は、8期11中全会の席上で行われたと考えられ、毛沢東も聞いていたと思われる。鄧小平の発言の裏には、クーデター計画を否定して共産党の体面を守ろうとする心理と、自身の劉少奇への裏切りを糊塗しようとする心理が働いている。

### 3

最後に、レポートの細部を具体的に検討する。レポートには多くの人物が登場し様々な役割を演じている。これらの登場人物たちの行動を、今日では種々の資料から明らかにしている1966年8月の政治状況の中に置きなおして検討する。そして登場人物たちの行動が、明らかにしている当時の政治状況との間に矛盾を生じないならば、レポートの核心内容すなわち中央委員会開催の駆け引きと武力衝突の危機の存在には、大きな信憑性が与えられる。毛沢東との軍事的対立も辞さぬという劉少奇の態度は、あり得たのである。

レポートに最初に登場する重要人物は、鄧拓である。鄧拓は彭真が第一書記を務める共産党北京市党委員会の機関紙である「北京日報」の編集長であり、レポートの述べるのとおり1966年4月以来、人民解放軍の機関紙である「解放軍報」により名指しの攻撃に晒されていた。<sup>19</sup>このあと鄧拓は5月18日には自殺してしまう。<sup>20</sup>ただしその死はすぐには外部には伝わらなかったようであり、レポートはその死を伝えていない。鄧拓の自殺は抗議の意思表示であり、腹心の部下を自殺に追いやられた彭真が、毛沢東に対し如何なる激しい感情を抱いたとしても不思議ではなからう。

レポートは、林彪が6月の初めに大将の楊成武と同じく腹心の楊勇を北京に派遣し、力づくで北京市党委員会を改組させたと述べる。6月1日を境に北京の状況が大きく変化することは、すでに述べたが他の資料によっても裏打ちされる。楊成武は当時、人民解放軍総参謀部のNo.2で複数の副総参謀長の筆頭であり、やがて代理総参謀長に就任する。楊勇も副総参謀長の一人であった。<sup>21</sup>楊成武はこのあと1968年になり失脚するが、それまでは一貫して毛沢東、林彪と行動をとる人物である。<sup>22</sup>

レポートでは重要な役割を果しているにもかかわらず、これまで注目されてこなかった人物に李雪峯がいる。解任された彭真に変わり、李雪峯が北京市党委員会第一書記に就任したことは、いずれの資料にも明らかである。しかし李雪峯が劉少奇と鄧小平の橋渡しとなり、中央委員会全体会議の多数派工作に参加していたと述べるのは、レポートだけである。李雪峯とは、どのような政治的背景を持つ人物なのか。

台湾の国際関係研究所から出版された『中共人名録』の初版に、以下のとおり李雪峯の経歴が明らかである。<sup>23</sup>李雪峯は1907年生まれ、古参党員で、1937年の日中戦争勃発から1949年の中華人民共和国

成立までの間は、一貫して劉少奇と鄧小平の下で活動していた。したがって、李雪峯が両者の橋渡しとなったことに何の矛盾もない。さらに李雪峯は、1940年以降は各地の共産党軍の政治委員を務めており、軍人の中に大きな影響力を持っていたと考えられる。1953年から54年にかけては、林彪の下で中南行政委員会副主席を勤め、林彪との間にも人間関係が築かれていた。

李雪峯は1956年の第8回共産党全国代表大会（8全大会）で中央委員に選出され、新設の中央委員会書記処の書記にも選出された。書記処の総書記は鄧小平である。8全大会は、劉少奇と鄧小平が毛沢東の独裁権力を掣肘するために共産党の組織体制と規約を一新した大会である。このことからわかるように、李雪峯は劉少奇・鄧小平ラインの申し子であり、レポートのいう劉少奇と鄧小平による多数派工作への参加は、当然のことであった。

はたして文化大革命が激化すると、李雪峯はどのような境遇におかれたのであろう。毛沢東・林彪派からは当然のこととして打倒対象と見なされるはずであった。ところが予想に反して李雪峯は、8期11中全会では中央政治局員候補に抜擢されている。丁望はこの理由を、次のように言う「李雪峯は、当初は江青が後押しする紅衛兵たちから猛烈に攻撃され、劉少奇・鄧小平路線の忠実な実行者だとみなされていた。しかし毛沢東たちは、おそらくは新しい幹部政策の一環として、幹部に対する打撃を縮小し、何人かを典型事例として革命委員会の職務を担当させたのである」と。<sup>24</sup>

ちなみに革命委員会とは、従来の省単位の地方行政組織を破壊した文革派が、新たに成立させた地方行政組織であり、文革派はこれを「奪権」と称していた。李雪峯は1963年以来、華北局第一書記として地方で勢力を握っていた人物であり、同時に北京軍区の政治委員でもあり軍隊

にも足場を持っていた。<sup>25</sup> 文革派としては、勢力扶植のために使える人物は使ったのである。李雪峯は1969年4月に開かれ林彪が毛沢東の後継者に指名された9全大会でも、中央政治局員候補に再選されている。<sup>26</sup>

劉少奇派の多数派工作に加担した西北局第一書記の劉瀾濤の場合も、李雪峯と同様に8期11中全会では中央政治局員候補に抜擢されたが、やがて失脚する。<sup>27</sup> 丁望の分析を参考にして考えられる失脚理由は、李雪峯が毛沢東・林彪派から明確な対立分子に分類されておらず、更には人民解放軍の中にも人脈を持っていたことに比べて、劉瀾濤は明確な対立分子であることみなされていたことであろう。

毛沢東主導の文革開始が宣言された8期11中全会では、林彪との武力衝突の当事者となりえた王恩茂でさえも、中央委員に再選されている、丁望はこの人事について、地方の軍区を統括する軍人の党員たちがほとんど失脚しなかった事実を踏まえながら、次のように分析している。「毛沢東グループは地方軍区の首長を取り込み、地方の「奪権」を完成させようとした。このほか、彼らの全てを党内の走資派として肅清すれば、軍隊の団結に大きな妨げが生じる。毛沢東グループは利害得失の観点から、彼らに対して適切に譲歩したのである」<sup>28</sup>。

レポートの語る劉少奇たちの多数派工作では、西南局第一書記の李井泉、烏蘭夫（内蒙古地区の最高指導者）、李葆華（華東局書記、李大釗の子、彭真を叔父さんと呼んでいた）らが重要人物として登場する。これらの人々についても検討してみよう。

李井泉は1956年の共産党第8回全国代表大会で政治局員に選出され、1966年8月の8期11中全会でも、そのまま再選された。彼の實力の大きさがうかがえる。この實力の背景には、李井泉が成都軍区第一政治委員として軍にも足場を築いていた事実がある。<sup>29</sup>

安藤正士・太田勝洪・辻康吾『文化大革命と現代中国』には、李井泉

について次のように述べられている。「四川省は・・事情が少し異なる。ここは、・・鄧小平と、反毛・林派の軍の元老賀龍の根拠地であり、李井泉政治局員が長期にわたって経営してきた、いわば独立王国であった。・・李井泉の支配は強力で、この地域の造反派大衆組織はかえって「反革命組織」と認定され、李井泉の大衆組織に圧倒される情況にあった」と。このあと1967年の5月になり、毛沢東・林彪が形成していた中共中央は、李井泉の西北局第一書記および成都軍区第一政治委員の職務を解任し新たに革命委員会準備小組を作る方針を発表することになる。そして李井泉は、1969年4月の9全大会では政治局員に再選されることはなかった。<sup>30</sup>

烏蘭夫（ウランフ）は、モンゴル自治区党委員会第一書記であり、李雪峯が第一書記をつとめる華北局の第二書記でもあった。56年の8全大会で中央委員候補に選出された劉少奇・鄧小平ラインの人物であり、毛沢東・林彪派からは明確に対立する人物として分類されていた。しかしその地位は、1966年8月の8期11中全会でも変化しなかった。<sup>31</sup>

ところがウランフは、この直後の9月に文革急進派により内モンゴルの自宅を包囲され拉致されそうになる。この事態に対して周恩来が動き、ウランフは軍の力により救出されて北京の南海に到着し、このあと、北京郊外の宿泊施設にかくまわれていたという。<sup>32</sup> ウランフはこのあと、1969年の9全大会で失脚するが、文革終了後の11全大会では政治局員として復活した。<sup>33</sup>

最後にレポートが華東局書記と記述する李葆華であるが、丁望の示す「中央分局負責人名単」によれば、華東局の第二書記をつとめている。<sup>34</sup> そして第一書記が任命されていないので、李葆華が最高責任者であった。レポートの信憑性を裏打ちする。また李葆華はレポートのいうとおり李大釗の子である。<sup>35</sup>



最後に、レポートの内容の核心部分である人民解放軍同士の衝突の危機に関して検討する。レポートは、1966年7月18日から20日にかけての状況を次のように述べる。

「新疆軍区司令員の王恩茂（中央委員）が羅瑞卿の命令を奉じて、陝西省に駐屯している指揮下の一個師団を北京に向けて進発させた。これに対し毛沢東、林彪、および新任の総参謀長代理である楊成武は、直ちにこの師団の師団長に進軍停止の命令を打電し、間一髪のところまで内戦の危機が避けられたのである。当時、林彪の軍隊は山西省で作戦部署についており、もし王恩茂の部隊が進んでくれば武力で阻止しようとしていた。しかし最高当局からの命令に接した師団長が、進軍を停止したのである」

王恩茂は第1野戦軍の出身であり、林彪の第4野戦軍とは別系統の軍人として新疆に18年以上もどまり続け、独立王国を築いていた人物である。新疆ウイグル自治区の第一書記であり、新疆軍区の司令員と政治委員を兼職していた。このあと毛沢東・林彪派は王恩茂の権力を殺ぐことにとり、王恩茂は新疆軍区司令員を解任される「解任は1968年の8月になり判明」<sup>36</sup>。

しかし毛沢東・林彪派は王恩茂を新疆軍区司令員から解任したものの、それ以上は手が出せず、王恩茂は軍人としての実力を背景に相応の地位に留まっていた。1969年の9全大会では降格されたとはいえ中央委員候補に選出されている<sup>37</sup>。

このあと王恩茂が文献上に再び姿をあらわすのは、管見では1976年10月のいわゆる「四人組」逮捕の際である。王恩茂はこのとき、南京軍区の副政治委員として上海に拠点を持つ「四人組」包圍網の一翼を担ったという<sup>38</sup>。

王恩茂に進軍命令をだした参謀総長の羅瑞卿は、すでに激しい批判に

毛沢東VS劉少奇そして鄧小平

さらされており自殺未遂まで起していた人物である。しかし丁望の記述に基づけば、羅瑞卿は7月末までは総参謀長の職に留まっていた。丁望は、羅瑞卿に代わって参謀総長代理に就任した楊成武の経歴を詳しく跡付けているが、参謀総長代理への就任は8月とされる<sup>39</sup>。それゆえレポートに見られる、7月末段階での「新任の参謀総長代理である楊成武」という記述は、実情を反映していると考えられる。

以上のとおりレポートの伝える1966年夏の北京の政治状況は、現時点で明らかにされている当時の政治状況とのあいだに、十分な整合性を保っている。

しかしレポートには、一つだけ単純な事実誤認がある。この事実誤認は、レポートの他の部分の正確さと比べると違和感があり、レポートの信憑性を揺るがす深刻な事態であるとみなすよりは、一種の「ボカ」と考えたほうが実情に即している。レポートが誤認している事実は容易に確認できることなので、中国語への翻訳の際に修正できたと思われるが、なぜかそのままにされている。セルビア人記者が漢字に不案内で文献を読み間違えたのか、セルビア語→英語→中国語という翻訳作業の過程で錯綜してしまったのか、読者は如何にお考えであろう。

事実誤認は、8期11中全会で入れ替えのあった政治局員の序列に関するものである。レポートでは、林彪が政治局員の第16位から第2位に昇格し、劉少奇が第2位から第7位に降格され、鄧小平の序列はそのままであったと述べられている。さらにレポートには、「鄧小平について」と、当初は劉少奇と結託し最後には毛沢東・林彪派に投降し、功績と過ちが半ばしていた。その結果、元来の地位に変化は見られなかったが、<sup>40</sup>という解説が付されている。

しかし事実は、林彪は第6位から第2位に昇格したのであり、劉少奇は第2位から第8位に降格されたのである。そして鄧小平の場合は確か

に大幅な変動はなかったが、全体の序列が変動した結果として、その地位は第7位から第6位に移動していた。<sup>④</sup>

### あとがき

劉少奇は、毛沢東の承認のもとに「なぶり殺し」にされた。その悲惨な実態は『毛沢東秘録』に明らかであるが、劉少奇は1967年7月に中南海の自宅を数十万人の造反派に包囲されて残酷な批判集会に引き出され、二時間も前かがみで立たされ罵声を浴び続けた。このあと自宅監禁中の1968年10月に、共産党第8期12中全会により全ての職務を解任され共産党を除名された。そして一年後の1969年10月には病身のまま北京から軍用機で河南省の開封に移され、倉庫部屋に放置されて肺炎による高熱と嘔吐を繰り返し11月には死去した。劉少奇の遺体は偽名で火葬され、その死は公表されなかった。<sup>④</sup> 劉少奇の名誉回復は、鄧小平が最高指導者となり文革を否定した1980年2月のことである。

鄧小平の待遇は、劉少奇に比べれば恵まれたものであった。鄧小平は失脚するが党籍は保ったままであり、1973年には副首相として復活したのである。

鄧小平の三女である毛毛の書いた『わが父・鄧小平「文革」歲月』によれば、鄧小平は1967年9月から中南海の自宅に監禁されたが、コックと用務員は残されていた。このあと1969年10月になると、労働改造の名目で江西省に夫婦で移動させられトラクターの修理製造工場で働くことになるが、その労働状態には在地の共産党幹部による細かな配慮がなされており、身の安全も保障されていた。<sup>④</sup>

「資本主義への道を歩む走資派」のNo.1とNo.2として、同じように文革派からの激しい批判に晒された劉少奇と鄧小平の待遇に見られる大きな

差異は、何に起因しているか。いうまでもなく、両人の待遇に差をつけるよう命令したのは毛沢東である。

本稿で明らかにした1966年夏の権力闘争の実態を背景においてみると、「劉少奇！貴様は本気で私を抹殺する気だったのだな！それならなぶり殺しも辞さないぞ」という毛沢東の怒りが聞こえてくるのではないか。中国の権力闘争とは何とも壮絶なものである。

最後に、本稿が基本資料として依拠するレポートの執筆時期であるが、レポートは、1966年8月18日以降12月以前に執筆されたと考えられる。レポートの末尾に、「彭真は今も巨大な住宅でのんびり暮らしており、出入りに際しては大勢の警備員がつき従っている。北京にいる外国人記者の誰もが、情況は沈静化しておらず更に大きな闘争が醸成されていると感じている」と記され、嵐の前の静けさが描写されているからである。

事実として、毛沢東は1966年12月までには天安門広場において6回もの「紅衛兵」の閲兵を済ませ、文化大革命の推進とそれにとまなう共産党内の反対勢力に対する攻撃の尖兵たちを育成していた。そして1966年の12月には、それまで迫害をまぬかれていた彭真や羅瑞卿をふくむ多くの幹部たちが紅衛兵に逮捕され、残酷な闘争大会で暴力を振るわれることになる。そして翌年67年1月からは、ついに劉少奇も同様の情況に投げ込まれるのである。<sup>④</sup>

### 注

- ① ソ連共産主義史上で有名な1956年2月の共産党第20回大会でのフルシチョフのスターリン批判は、英訳による概要が3月16日のニューヨーク・タイムズに掲載され、6月4日にはアメリカ國務省から英訳全文が公表された。

- ② 竹内実編『文化大革命』、平凡社、1973年、26頁。宇野重昭『中国

共産党史序説』(下)、日本放送出版協会、1974年、165頁。竹内実編『文化大革命』は構成の基礎を、当時の香港で刊行されていた趙聰『文革運動歷程述略』に依拠している。同書の参考資料は巻末の「文献案内」に詳しい。

- ③ 丁望『中共文革運動中の組織與人事問題』、当代中国研究所、1970年、第1章、6-8頁。
- ④ 『毛沢東秘録』(上)、産経新聞社、1999年、167-170頁。
- ⑤ 巴拉奇・代内什(バラチ・ダイナッシ)『鄧小平』、解放军出版社、1988年5月、168頁。同書は巻末で、最新の出来事として、1987年6月の鄧小平の言動に言及している。原書の刊行は、1987年末か1988年初であろう。
- ⑥ 竹内実『毛沢東と中国共産党』、中央公論社、1972年、135頁。『人民手冊』(1957年版)に収録されている「中国共産党章程」には、第37条の末尾に、「中央委員会が必要と認めた場合に、中央委員会名誉主席を設けることができる」と述べられている。
- ⑦ 竹内実『毛沢東と中国共産党』、135頁。
- ⑧ 安藤正士編『現代中国年表1941-2008』、岩波書店、2010年、7月26日条。安藤編の『年表』は、中国語資料を網羅して編纂された労作である。『毛沢東秘録』(上)は、人民日報紙上での報道を7月25日とするが(143頁)、これは光明日報に報じられた日時である(竹内実編『文化大革命』、55頁参照)。
- ⑨ 『毛沢東秘録』(上)、142-3頁。
- ⑩ 毛沢東の北京帰還に関する同時代資料中の記述として、丁望は帰還日時を7月末とする(前掲書、第4章58頁)。同じく同時代資料である東方書店出版部訳編『中国プロレタリア文化大革命資料集成』(1971年)の別巻に収録される「年表」(1949-70)には、毛沢東の北京帰還に関する記載がない。このことから帰還日時が判明するには、時間が必要であったと思われる。ちなみに、安藤正士編『現代中国年表1941-2008』には、毛沢東の北京帰還の日時に関する記載はない。
- ⑪ 竹内実編『文化大革命』、22頁。
- ⑫ 丁望、前掲書、44頁。竹内実編『文化大革命』24頁。竹内実は、解放军

一個中隊が6月1日に北京大学に進駐したという説を紹介している。

⑬ 「日中記者交換協定」は、当時の中日友好協会会長であった廖承志と自民党の松村憲三議員らとの間でとり交わされた。「中国を敵視しない」、「二つの中国を造る陰謀(台湾独立)に加わらない」、「日中国交正常化を妨げない」の三点を、記者駐在の条件としており、日本の新聞の中国に関する自由な報道が大きく規制されることになった。

⑭ この後、文革が始まると日本人記者の多くが国外に追放される。中国の体面維持に都合の悪いことを報道したからである。しかし内部情報をスクープしたからではなく、漢字の読める日本人記者が夥しい「大字報」(手書きの壁新聞)から取材した文革の実情を世界中に報道したことが、宣伝機関を掌握して美化された文革を世界中に発信していた共産党の文革派の心証を害したのである。毎日新聞や産経新聞の記者たちの追放理由が、毛沢東の似顔絵を載せた事であるのが、出来事の本質を示している。もし日本人記者が、セルビア人記者のような文革分析をやっておれば、日本各紙の北京特派員は一時的追放ではまず、特派員の駐在は未来永劫許されなかったであろう。そして営業成績を気にする日本各紙にも、そこまでやる勇気は無かったのである。ちなみに産経新聞北京支局長であった柴田穂は1967年には「一貫した反中国報道」を理由に国外退去させられ、このあと産経新聞北京支局は31年間も閉鎖された(『毛沢東秘録』、163頁)。

- ⑮ 安藤正士・太田勝洪・辻康吾『文化大革命と現代中国』、岩波書店、1986年、42-43頁。
- ⑯ 丁望、前掲書、2頁。
- ⑰ 竹内実編『文化大革命』、20頁。安藤ほか『文化大革命と現代中国』、36頁。
- ⑱ 竹内実編『文化大革命』、21頁。安藤ほか『文化大革命と現代中国』、37頁。
- ⑲ 竹内実編『文化大革命』、22頁。『毛沢東秘録』(上)、162頁。
- ⑳ 安藤正士編『現代中国年表1941-2008』、1966年5月18日条。矢吹晋『文化大革命』(講談社、1989年)は末尾の資料一覧の中で、鄧拓の死を5月16日と注記する。



- ⑲ 丁望、前掲書、169頁。
- ⑳ 丁望、前掲書、139頁。
- ㉑ 『中共人名録』、中華民国国際関係研究所、台北、1967年。
- ㉒ 丁望、前掲書、2頁、30頁。
- ㉓ 丁望、前掲書、239頁。華北局については本稿第1章の「地区」に付された「」内の注釈を参照。1950年に全国に6つの軍区が成立し、それぞれの軍区は大軍区として数省を統括したが、1955年には12の軍区に細分化された。北京軍区は12軍区の1つ（李谷城『中共党政軍結構』、明報出版社、1989年、香港、478頁、482頁）。
- ㉔ 安藤・太田・辻『文化大革命と現代中国』、117頁、表4。
- ㉕ 丁望、前掲書、4頁。
- ㉖ 丁望、前掲書、7頁、30頁。
- ㉗ 丁望、前掲書、2頁、237頁。
- ㉘ 安藤ほか『文化大革命と現代中国』、92-93頁。
- ㉙ 『毛沢東秘録』（上）、188頁。丁望、前掲書、2-3頁。
- ㉚ 『毛沢東秘録』（上）、188-9頁。
- ㉛ 安藤・太田・辻『文化大革命と現代中国』、117頁、表4。同157頁、表7。
- ㉜ 丁望、前掲書、29頁。
- ㉝ 李葆華は後年になり「回憶父親李大釗的一些革命活動」を執筆している。（尚恒其主編『李大釗略伝』、中国社会出版社、1995年、所収）
- ㉞ 丁望、前掲書、30頁、235頁、167頁。『中共人名録』（第二版）、国立政治大学国際関係中心、1983年、58頁。丁望、前掲書、113-114頁。
- ㉟ 『中共人名録』（第二版）、国立政治大学国際関係中心 1983年。
- ㊱ 『毛沢東秘録』（上）、38頁。
- ㊲ 丁望、前掲書、144頁。
- ㊳ 丁望、前掲書、1-2頁。
- ㊴ 『わが父・鄧小平…「文革」歲月』（上）、藤野彰ほか訳、中央公論新社、2002年、7頁、198頁。
- ㊵ 竹内実編『文化大革命』、27-33頁。

（本学文学部教授）